

2019年度第1回情報教育研究委員会情報専門教育分科会議事概要

I. 日 時：令和元年11月15日（金）17：00～19：00

II. 場 所：私立大学情報教育協会事務局 会議室

III. 出席者：大原主査、須田委員、藤田委員、佐野委員、巳波先生（関西学院大学）
（事務局）井端事務局長、野本

IV. 議事内容

1. 「AI 活用人材育成プログラム」を進めて行く上での大学と企業との接続環境について、関西学院大学での取組みの説明を受けた後、企業から大学・大学から企業への支援などの意見交換を行った。

- ・ 教育方法などの質問では、業務に精通しているところのドメインスペシャリストの必要性は、データサイエンス教育の中で説明、機械学習とディープラーニングは分けて説明をしている。
- ・ シラバスの作成は3か月、授業設計をした上で、内容を企業に依頼した。10科目を1年間で新たに教材を含めて作成をした。企業側が中心となり作成し、教員側で確認・意見をし、更新を進めた。
- ・ 受講者には、文系の学生も半分おり、1年で3科目受講することもできる。
- ・ 定員は30名で行い、来年は50名で計画している。ただし、入門は80名の予定。
- ・ 教材データは、企業から実データを加工したものを提供してもらっている。PBL では可能な限りデータを提供してもらい進める予定にしている。
- ・ 企業側から非常勤講師として集中講義を行っている。
- ・ 単位は、一般教養の中に位置づけ、1科目2単位としている。
- ・ 来年度からは、TAを配置予定（PCの使えない学生に学生からのサポートなどやる気を喚起）
- ・ ICTスキルの低い学生を持ち上げることに 대해서는、「情報基礎科目」を取得した上での参加を要件としている。
- ・ WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム、SGH（スーパーグローバルハイスクール）の枠で高校向けのコンテンツを作成しており、連携校はスタディサプリで利用できる。
- ・ 共同開発の形式をとっており、費用が発生している。企業側では作成した教材を社内教育での利用の可能性を検討している。
- ・ 学びを進めたい学生は、授業外プロジェクトとして学習を進めている。

2. 私立大学と企業との接続モデル構成の枠組みについて、以下のような意見交換を行った。

- ・ AIを使って、データに慣れるところから学ぶ必要がある
- ・ 社会と接点を持って進め、どのようなバランスで、そのように理解させ、支援してもらうのか、条件は何か
- ・ 共同開発の可能性と課題として、AI、リーダーシップ、環境などのテーマで進められている。
- ・ AIなどデータ系の内容では進められるかもしれないが、他の部分では企業が賛同するか疑問を感じる。共同研究の形式では困難（期待薄）ではないか。
- ・ インターンシップが1～2日程度の期間での実施で、長期の受入れが減少している。
- ・ カリキュラムと企業が求めているものが、どのようにマッチングするのか、つなぐためには、双方向的な接点が必要ではないか。
- ・ 大社接続の接点となるヒントを整理してはどうか。アイデア、例えば、PBLを通じて学びを高め、学生の無垢な発想のアイデアを企業が利用すること。
- ・ 公共の団体、地域の団体との接続と、企業との接続を考えてはどうか。分野横断型で進め、どのように具体化させるかが課題。
- ・ コンテストの活用を取り入れて、分野横断への仕組みとして利用してはどうか。大社接続のイメージの一つとして、アイデアでの連携（コンペティションの利用など）が考えられないか。
- ・ 仕組みとしては、昨年度まとめたシステム例を使い、企業に呼びかけるチーム、テーマを選定して大学に呼びかけるチーム、企業を引き入れるチーム、その条件や、規模の大小での接続も考えられる。

V. 今後のスケジュール

次回の委員会は12月20日に開催し、大社接続のイメージの一つとして、コンテスト・コンペティションの利用などPBLへの連携参加を募るアイデアを持ち寄り検討することになっている。